

報告①

鞠智城の調査・研究と成果

講演者紹介

長谷部 善一（はせべ よしかず）

熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館 館長。専門
は日本考古学（古墳時代）。学芸員。

平成三年熊本県教育庁に入庁。文化課、装飾古墳館、岩手県教育
委員会（併任）、文化庁（研修生）等を経て、令和四年四月から現職。

鞠智城の調査・研究と成果

歴史公園鞠智城・温故創生館館長 長谷部 善一

皆さん、こんにちは。歴史公園鞠智城。温故創生館の長谷部です。本日はよろしく願います。私からは、現在までの鞠智城の調査と研究の成果について報告をさせていただきます。

一 はじめに

先ほど小田先生から、鞠智城について今までどのような調査がされてきたのか、どのような方々が関わられたのか、さらに今後の課題にまでお話をいただきました。現在、鞠智城に携わっている者として非常に身の引き締まる思いです。小田先生の鞠智城へのあたたかな気持ちを感じているところでございます。

鞠智城は皆さんご存知のとおり、熊本県の北部、山鹿市と菊池市の境に位





置する古代山城です。現在はスクリーンに映しだしているように整備が進んでおり、子どもたち、地元の小学校が中心ですが、鞠智城の説明ボランティア会の方たちと一緒に鞠智城を学ぶシーンも多くみられるようになっております。(図1)

二 鞠智城と大宰府に関わる研究史(図2)

(一) 鞠智城築城とT S M Cの熊本進出

現在、熊本県の菊池市及びその周辺は、台湾の半導体メーカーT S M Cの工場進出があり、地域自体全国から注目されるとともに大きく変わってきている地域です。この状況は、鞠智城が千三百五十年ほど前に菊池郡と山鹿郡の境に築城された時と非常に状況が似ているのではないかと私たち鞠智城を研究している者は感じています。

鞠智城が在るのは菊池郡の西端で、現在の山鹿市菊鹿町米原と菊池市堀切です。この山中にヤマト政権の発注で渡来系の人、百済から来た人々の指導を受け鞠智城が築城されます。当時、人々は竪穴建物に住んでいた。そういったところに、城門・土塁を巡らせ、大

鞠智城築城とTSMCのくまもと進出

—鞠智城築城当時と、今のくまもと—



- 菊池郡米原の地に当時、東アジアでの最先端の技術をもつ古代山城の築城。
- 築城後には“車路”官道と、後に作られる“西海道”が連結し、鞠智城と大宰府の連絡路の強化。
- 菊池郡（西寺遺跡カ）、山鹿郡（御宇田遺跡）、合志郡or山本郡（上鶴頭遺跡）など官衙の建設。

- 菊池郡菊陽町に世界でも最先端の技術をもつ半導体メーカーが進出。今後
- 建設後には渋滞緩和策として中九州横断道路の建設促進。
- 周囲には国内大手の半導体メーカーなど、関連施設の建設ラッシュ。

型掘立柱建物群が建築されます。菊池川流域に住んでいた人々は、非常に大きな驚きをもったのではないかと思います。

スクリーンの右写真は、TSMCの第一工場が建設されたところ。この隣には今後、第二工場が建築されますので、更に大きな施設群となっていくと思います。鞠智城も、最初は狭い範囲の中で建物群の建設が始まっております。唐・新羅連合軍の侵攻に備えて、まず中枢の施設、掘立柱建物と外郭の防御施設、城門・土塁線をつくり城としての最低限の機能を整備しますが、同じようにTSMCの工場も最初は中核施設、事務所棟、第一工場が建設され、第二工場がで次第に様々な役割が広げられていくようです。

古代においても鞠智城が築城された後に、菊池郡や山鹿郡が存在する菊池川流域において鞠智城を補完するような施設群が建設され始めます。鞠智城が官衙的な役割を担うようになった鞠智城Ⅱ期以降、官衙的機能を補完する建物群が鞠智城の近くに相次いで建てられます。例えば、菊池郡においては、菊池郡家と想定される西寺遺跡がありますし、山鹿郡でいえば、山鹿郡家と想定す

る方もいる御宇田遺跡が山鹿市鹿本町にあります。いずれも鞠智城から歩いて一、二時間で行ける距離のところに、鞠智城と同時期に官衙が作られていたのです。

さらに今回、T S M Cの北側には、将来的には中九州横断道路に繋がる高規格道路の整備が始められています。前熊本県知事の蒲島郁夫さんのときに路線が決定されましたが、九州縦貫自動車道と接続し、福岡市からも一時間以内で来ることができる道路がつくられるのです。鞠智城の時代にも鞠智城の南、菊池平野、菊鹿盆地の中に「車路」と呼ばれる、今の国道に近い官道が作られています。それが大分県と熊本県、当時の豊後と肥後、そして肥後と筑後といったところを繋いでいました。

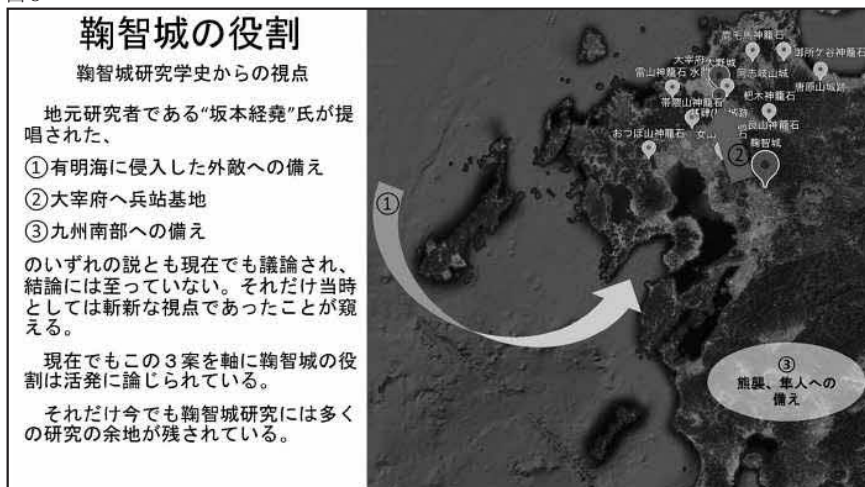
以上、現在のT S M Cの進出が鞠智城築城と非常に類似しているところを紹介しました。

(二) 鞠智城の役割

それでは資料三十五ページをお開きください。スクリーンを見ていただいても構いません。まずは鞠智城の役割というところからご説明をします。(図3)

六国史に記された鞠智城というものが、どういう城か、どこにあるのかについては江戸時代から議論がされてきました。『肥後国誌』、『菊池風土記』等の書物には、鞠智城が米原よなばるの地にあるのではないかと記載があります。先ほど小田先生のお話しの中でもありましたが、昭和に入ってから地元の研究者である坂本経堯先生さかもとつねたかが中心となってこの地を発掘され、鞠智城の遺構、遺物を確認なさいました。その調査をもとに、坂本先生は鞠智城の

図 3



鞠智城の役割

鞠智城研究学史からの視点

地元研究者である「坂本経堯」氏が提唱された、

- ① 有明海に侵入した外敵への備え
- ② 大宰府へ兵站基地
- ③ 九州南部への備え

のいずれの説とも現在でも議論され、結論には至っていない。それだけ当時としては斬新な視点であったことが窺える。

現在でもこの3案を軸に鞠智城の役割は活発に論じられている。

それだけ今でも鞠智城研究には多くの研究の余地が残されている。

役割について三つの役割を提唱なさっています。一つが、有明海から侵入した外敵への備え、二つが、有事の際に大宰府を支えるための兵站基地、三つは、九州南部への備えです。

坂本先生が提唱されたこの鞠智城の三つの役割は、現在も鞠智城研究の基本で、この説をベースに様々な意見が先生方から出されています。資料三十五ページには、これまでの研究者の方々が提唱されている意見を集めてみました。詳しいところは、また皆さんお帰りになってから読んでいただければと思います。

(三) 鞠智城と有明海

ここからは私見を挟みながら説明させていただきます。スクリーンをご覧ください。九州北部域の古代山城群と鞠智城を含めた位置を確認するため、東シナ海上空から東を俯瞰してみました。(図4)

有明海の奥には北部九州の古代山城群、さらに奥の方には瀬戸内海の古代山城群をみることができます。赤い印をつけているところが鞠智城です。

東シナ海から島原半島を回って有明海に入り北に進むと、現在の筑後川の河口部に行きあたります。そこには神籠石系の古代山城であるおつぼ山神籠石、帯隈山神籠石、高良山神籠石そして女山神籠石が山地や丘陵を背にして点在しています。もし、外敵が有明海から熊本平野に直接上陸してくる場合には、おそらく鞠智城が対応することになるとと思いますが、有明海を北上していった場合、筑紫、当時は大宰府があつた方面に進まれた場合には、帯隈山神籠石とか高良山神籠石といった神籠石系の古代山城が正面ということになってくるかと思います。

鞠智城は熊本平野に上陸された場合は先ほど言いましたように、鞠智城が外敵への対応することになりますが、鞠智城の立地を考えると、熊本平野と筑紫平野両方へ上陸された場合でも、両面で対応できたと考えます。基肄城以南には朝鮮式山城と定義される城は鞠智城しかない。そのような環境下におかれた鞠智城には、大野城・基肄城ほどの緊張感はないにせよ、城としての規模や機能など役割が与えられていたと考えます。鞠智城は大宰府から離れた地域にあ

鞠智城と有明海

有明海から見た北部九州の古代山城群

- 東シナ海から有明海に進入すると、正面に熊本平野が所在し、平野を望む低丘陵上に鞠智城が所在。
- 有明海に進入し北に転ずると筑紫平野が所在し、平野を望む背後の低丘陵上にはおつぼ山・帯隈山・高良山・女山の各神籠石系古代山城群が所在。
- 鞠智城は、熊本平野付近に上陸した場合には最前線としての基地、筑紫平野に上陸した場合にはその支援を行う城として、私は守る面と攻める面との両方の機能を併用した「押し出しの城」を提唱する小田先生の説を支持したい。



図 4

りますが、軍事基地としての城の機能を備えている以上は、そういった機能があったと思います。

一番下に赤で書いていますが、私は、基本攻めてきたら守り戦う、そして筑紫平野に上陸された場合はそちらを支援する、そして普段は兵站基地としての肥沃な穀倉地帯である熊本平野を背景に、兵站基地としての役割を担う、これが鞠智城だったと考えています。おそらく当時のヤマト政権においても主戦場は大宰府方面を想定していたと考えます。その背後になる肥後北部地域には様々局面で対応が可能な、朝鮮式山城としての規模と機能を有する鞠智城が築城されたのではないかと考えています。

これらのことから考えますと、小田先生が提唱される「守る」と「攻める」両方の機能を持たされた押し出しの城との考え方が鞠智城の役割りには一番しっくりくるのかなと考えています。

三 鞠智城調査研究の成果

続きまして、これまでの鞠智城の調査研究の成果について説明します。鞠智城は五期にわたる変遷がこれまでの調査と研究の中で分かっています。創建期（Ⅰ期）、隆盛期（Ⅱ期）、転換期（Ⅲ期）、変革期（Ⅳ期）それから終末期（Ⅴ期）に整理されています。

創建期・鞠智城Ⅰ期（図5）

まず、鞠智城の創建期です。七世紀後半に城としての最低限の機能を整備し、そこに駐屯する兵士が起居する

兵舎であるとか、城の中の水源としての貯水池、土塁と城門などの整備がなされていったのと考えています。小田先生のお話しにもありました。が、鞠智城には土塁構築に、「版築」と呼ばれる技術、これは当時最先端の技術ですが、渡来系の方々によりもたらされた技術があります。他に貯水池の堤に使われた「敷粗朶工法」と呼ばれる技術、水城（福岡県太宰府市ほか）でも使われています。このような最先端の技術が幾つも使われ、まず、城としての整備が図られた時期。これが創建期になります。

隆盛期・鞠智城Ⅱ期（図6）

続きまして隆盛期です。鞠智城の最も栄えた時期と言われている時期になります。「鞠智城跡Ⅱ期の建物」に青く塗りつぶして示していますが、長者原地区において多くの建物が建てられるのにあわせ、同地域の北東には細長い建物を「コ」の字形に並べた建物群があります。これは官衙的な建物、当時の役所に近い建物と考えられるなど、建物が充実していった時期になります。この当時、八角形建物、鞠

創建期

韋智城 I 期

軍事拠点としての最低限の機能が緊急的に整備された。

この時期は、御智城の築城期といえよう。頼朝平定奥州で起った「白河三の戦い」で奥州の奥平・奥郡の重要な拠点に落ちて、奥の白河城とともに関東が脅かされたためである。御智城の築城については「奥州の文系史」(1979年)、「大日本書」(1980年)、「奥州の歴史」(1981年)など、御智城の築城に述べたところがあること、1955年に修築された天守櫓、築城地とはほぼ判別し得られたと考える

この時期に輪智城では、樺太・根室・函
館の赤城門や向新・西側土塁跡を含む
外郭壁が構築され、城としての機能が高

道に整備されました。また、域内には、長野県東部の長野市山県町から長野市山県町第一、長野県東部地区中部地区にかけての長野市山県町に接されたと考えられる独立建築物が建造され、城域北側の吾田には貯水池が造成されました。

この時期に、城として利用される施設が整備されたように思いますが、建造された独立建築物の構成は多岐多様で、柱組の庫が少なく、小型の柱組建物が多い傾向にあります。これは、外周壁が途途に整備する一方で、城内施設の整備まで十分に平らにならなかったことが考えられます。



■：鞠智城！期の建物



■ 興智城工附の建物



■貯水法跡



■ 池ノ尾門跡

- ・城としての最低限の施設の整備（城門、土塁線、貯水池及び管理棟など）の整備。
- ・土塁線には「版築」技術の導入、貯水池には堤防状遺構に「敷粗朶」工法など当時の最先端技術、いわゆる渡来系技術が用いられる。

城を管理する建物や八角形建物など
城内の施設が最も充実した時期

この時期は、駒宮城の築造期にあたり
ます。若狭草原地区南から上里地区北一
帯にかけて、「コ」字配に配された竪
穴建物や縦長の倉庫群が出現する
など、建物の特徴に大きな変化が見出
ています。また、南に配置された3棟の八
角形建物が発見されるこの時期です。
これらの時期は「縄文前期」に記述され
ている駒宮城の築造期の特徴にあたりま
す。「コ」字配型の建物群は縄文管理・
運営に不可欠な施設と考えられ、城内
施設の充実が図られ、城としての

能が十分働いたのがこの時期です。また、日常生活に用いる土器の生産量が増える時期でもあり、施設の使用量が増えるとともに、城の管理や運営に多くの人員が配属されたことが推察されます。

出土した土器の大半は須恵器ですが、これらの貴重品には、熊野町大野城付近の宇治屋遺跡跡のものと、熊本県宇城地域の宇屋遺跡跡で製作されたものとが認められます。また、一部認められる土師器には「国文」と呼ばれる文様が施された内帯の土師器が知られてくると判明してまいりました。

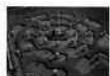


■ 鞠智城跡Ⅱ期の建物

- ・施設の拡充。『続日本紀』689年にみられる大野城、基肆城、鞠智城の「繕治」に該当。
- ・「コ」の字型掘立柱建物群、朝鮮半島に由来する“八角形建物”の建設。
- ・土器の出土量も最も多いことから、鞠智城の機能が充実した時期。



■ 土曜



■人角形建物



(左)八角形遺跡跡地状況 (右)復元された八角形遺跡

[illegible]

智城のシンボリックな建物として復元しておりますが、こういった建物もつくられた時期になります。

轉換期・鞠智城Ⅲ期（図7）

続きまして転換期です。八世紀前半から中頃にかけての時期になります。鞠智城の建物は地面に穴を掘つて柱を建てる掘立柱建物が最初に建てられるのですが、この時期には、小型の礎石の上に柱を建てる礎石建物へと転換していきます。この礎石建物への構造的な変化は、建物を長持ちさせるためと考えられます。

また、転換期には、貯水池から木簡が出てきております。「秦人忍□（米カ）五斗」と書かれていますので、鞠智城内に米を貯蔵し始めた時期なのかな、とも思います。荷符木簡が付けられた米が持ち込まれ、礎石建物によって米が備蓄される、そういった仕組みが分かってくる時期になっております。

ここでは途中ですが、ここ大事なところです。スクリーンの右半分には、鞠智城の土器の出土量と組み合わせを、時期ごとに図示しま

転換期

鞠智城Ⅲ期

礎石建物が建てられはじめるなど建物の様相に変化が見られる。

この時期は、鞠智城の転換期にあたりません。このころは、城の維持・管理に必要な最低限の人員のみを配置するなど、時局を静観しながらも、長寿宮跡は東宮院として宮廷建築物から管理官宅の役割も果たしていると考えられます。また、貯水池跡から出土した木簡、木簡城内で初めて礎石建物の出現します。この時期のものと考えられます。この形跡は、礎石建物の構造的特徴は、建物の基礎や敷地を平らにするためと考えられることから、直前にわたる城の存続を意図していたことがうかがえます。しかし、この時期に該当する土器はほとんど出土していません。



■ 鞠智城跡Ⅲ期の建物



■ 49号建物跡
(礎石建物跡)

■ 63号建物跡
(礎石建物跡)

■ 木簡
(貯水池跡から出土した木簡で「大宰府」の文字が刻まれている。)

- ・ 掘立柱建物から、小形礎石建物へと変化が始まる。
- ・ 土器の出土数が減少し、城を管理する最低限の員数しか配置されていない。
- ・ 貯水池跡出土の木簡は当該期のもの。大宰府や平城京で出土する西海道関連の木簡形状に類似。
- ・ 大宰府管理のもと最低限の維持管理の状態で。

図 7



図 8

した。(図8) 鞠智城Ⅰ期からⅡ期までは、土器が非常に多く出てきます。どんどん増えていく、右肩上がりです。出土してきますが、その後は激減し、空白ともいえるⅢ期において、また八世紀後半から増えてくる。最終的には十世紀後半に廃城になります。このような形で並べてみると、鞠智城への人の出入りや、鞠智城がどう整備されていたのかの動向をうかがえる資料になっています。

変革期・鞠智城Ⅳ期(図9)

それでは続いて変革期です。八世紀中頃から九世紀の中頃にかけてです。先ほど小型の礎石建物が増えて転換が図られたと言いましたが、この後、今度は礎石が大型化していきます。そして礎石建物の倉庫が建ち並ぶ時期になってきます。

鞠智城Ⅲ期までは官衙的、役所的な機能を備えていたのではない、か言っていました。そのような建物がなくなり、倉庫が建ち並ぶ風景が鞠智城に広がっていきます。そして、この時期の『文徳実録』には、「礎石建物が燃えた、不動倉十一字が焼失した」という記事が

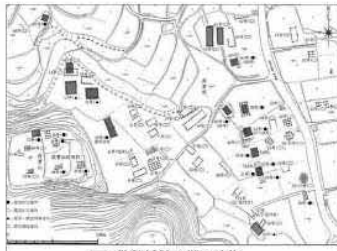
変革期

鞠智城Ⅳ期

礎石建物が大型化。食糧等の備蓄施設としての機能が大きくなる。

この時期は、鞠智城の全盛期にあたる。土器は、前期や中期の段階から比べて、より多量に出土する。この時期には、多くの礎石建物が認められる。そのうち、多くの礎石建物が、倉庫として利用されている。また、この時期には、多くの礎石建物が、倉庫として利用されている。また、この時期には、多くの礎石建物が、倉庫として利用されている。

この時期には、多くの礎石建物が、倉庫として利用されている。また、この時期には、多くの礎石建物が、倉庫として利用されている。また、この時期には、多くの礎石建物が、倉庫として利用されている。



鞠智城Ⅳ期の建物

- ・「コ」の字型配置の建物群がなくなり、建物の構成が倉庫へと変化。礎石建物の大型化。
- ・礎石建物の礎石に火災痕跡が認められるなど、『文徳実録』天安2年(858年)の条に記載のある不動倉11棟の焼失記事と関係。
- ・出土する土器が須恵器から土師器主体へと変化し、在地色が強まる時期。食料を貯蔵する倉庫群へと変化。



鞠智城Ⅳ期の建物



衣倉に米を運び入れ、様子

出ています。長者山、長者原地区の発掘調査では焼米が大量に出土していますが、そういった米を貯蔵する倉庫としての機能が充実した時期になってくると思います。さらに出土する土器が須恵器を中心とした広域に流通する、牛頸窯跡群や八女古窯跡群（福岡県）の須恵器が鞠智城で減少し、代わりに肥後国内で作られる須恵器や土師器の出土量が増加する時期になっています。この時期を境に鞠智城が、大宰府の管理から肥後国もしくは菊池郡の管理に移っていったのではないかと考えられます。このように、鞠智城にとっては大きな変化があった時期と考えています。

終末期・鞠智城Ⅴ期（図10）

続いて、鞠智城の終末期です。九世紀中頃から十世紀中頃までです。この時期には『日本三代実録』に、「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現象の記事の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も

終末期

鞠智城Ⅴ期

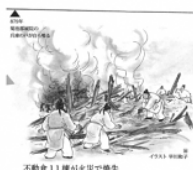
食糧等の備蓄施設として存続、しかし、10世紀中頃には城としての役割を終える。

この時期は、鞠智城の終末期にあたります。この時期には、『日本三代実録』に「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現象の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も

この時期は、鞠智城の終末期にあたります。この時期には、『日本三代実録』に「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現象の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も



■：鞠智城跡Ⅴ期の建物



不慮火災で焼失



■鞠智城跡Ⅴ期の石造大倉庫

鞠智城跡Ⅴ期の石造大倉庫は、大宰府の管理から肥後国もしくは菊池郡の管理に移ったと考えられます。この大倉庫は、鞠智城跡Ⅴ期の建物群の中でも最も大きな建物であり、その規模から推測される貯蔵能力は非常に高いと考えられます。

- ・鞠智城の最終末。貯水池の下流側半分は機能を継続しており、大型の礎石建物も立て直しが認められることから、城ではなく倉庫群として機能。
- ・『日本三代実録』天慶3年（879年）「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸がおのずから鳴る」と記載あり。
- ・貯水池の機能が停止する10世紀第3四半期をもって鞠智城は廃城したと考えられる。

図10

減少を始めます。創建期からありました貯水池も、下流側から埋まり始め最終的に十世紀に入るとその利用は低下していきます。最終的には、貯水池が管理されなくなった十世紀の第三四半期頃に鞠智城は終焉を迎えます。

四 おわりに

今まで鞠智城は非常に長く調査されてきましたが、簡単に早足で見えていくと、このような五期の遷り変わりの中に調査成果を収めていくことができます。

私の資料には「これからの鞠智城研究」と題して「鞠智城の範囲についての検討」、「鞠智城に関連する周辺遺跡の研究」及び「鞠智城出土文字史料と菊池郡内の墨書土器等研究」を載せております。これは後程シンポジウムの中で、小田先生のご意見も伺いながら、言及していきたいと思えます。

歴史公園鞠智城・温故創生館からの報告は、これで終わらせていただきます。